

四季成り性品種を利用したイチゴ夏秋どり栽培における

定植時期と収量の関係

農業・園芸総合研究所

1 取り上げた理由

四季成り性品種を用いたイチゴ夏秋どり栽培において、定植時期と果実収量との関係を調べ、定植時期の違いが月別の果実収量に及ぼす影響について傾向を把握したので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 定植時期が早いほど、総収量、商品果収量ともに多くなる。とくに、2月中旬定植の場合には、商品果収量で400g/株以上となる。
- 2) 2月～4月に定植した場合には、8月以降の果実収量は大きく低下する。一方、6月に定植した場合には、8月の収量は多くなるが、その後激減する(図1)。
- 3) 商品果平均1果重は、定植時期よりも、収穫時期の影響を強く受け、6月は13～16g、7月は10g前後となり、8月以降は7～8gで推移する(図2)。

3 利活用の留意点

- 1) やし殻繊維を培地とする高設養液栽培システムを利用し、宮城県内の平地（名取市）でパイハウスでの栽培試験の結果である。
- 2) 定植後に出蕾してきた2花房はとり除き、その後に発生した花房から開花、結実させた。
2月定植の場合には5月上旬から、3月定植の場合には5月中旬、4月定植の場合には5月下旬以降から出蕾した花房を開花、結実させた。

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名および研究期間

生産性の高い簡易施設及び設備の開発と栽培技術の確立 (2004~2006 年)

2) 参考データ

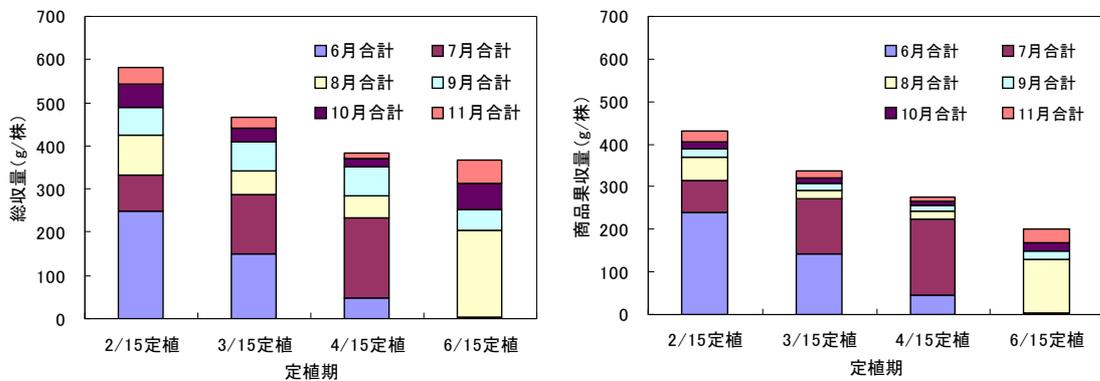


図1 定植時期の違いが月別果実収量に及ぼす影響 (商品果は 5g 以上の正形果と 7g 以上の奇形果とした)

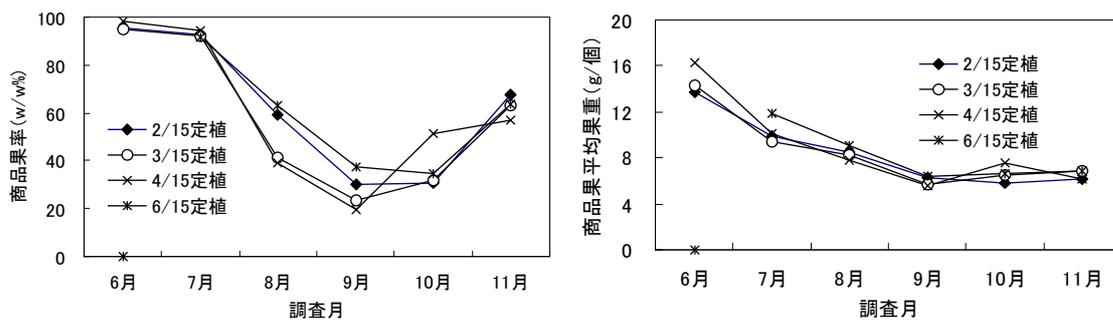


図2 定植時期の違いが商品果率, 商品果平均1果重に及ぼす影響 (商品果は 5g 以上の正形果と 7g 以上の奇形果とした)

耕種概要: 供試品種「ペチカ」, 冷蔵苗を購入し, やし殻繊維を詰めた直径 9cm のポリエチレン製ポットに仮植して, 最低夜温 10℃として約 1 ヶ月間株の養成を行った後に栽培ベッドに定植した。定植後は培養液 (大塚 A 処方) 濃度 EC0.6 d S/m で, 株当たり 150~300ml/日給液した。目数は 2~3 となるように管理し, 花房当たりの着果数は 5~7 個となるように制限した。

3) 発表論文等

なし